九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

出雲地域の憑物現象と北方シャマニズム

野村，暢清

https://doi.org/10.15017/2328648

出版情報：哲學年報. 37, pp.1-27, 1978-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

出雲地域の憑物現象と北方シヤマニズム

野　村　暢　清

従来，出雲地域の憑物現象研究の為に，若干の村落，部落での細かな集約的研究を進めて来た．しかし，この事象の研究を進めるにつれて，その究明の為には，時間的，空間的に，もっと広範な宗教文化の流れの中で考えることが必要であると考えるに至った．本論文は，この出雲地域の憑物現象の「憑く」「神憑る」という局面を，北方シヤマニズムとのつながりの中で考えてみようとするものである．

(一)

私は出雲市旧神門村及び安来市旧大塚村地域を中心に出雲地域の憑物現象の細かな分析的研究を進めて来たが，この現象の場合，村落における黒白の區分なども重要な因子ではあるが，憑く，神憑るということ，トランスの状態で話すことに，村落や部落の人々が重要な意味を認めていることも，その一つの重要因子である．

旧出雲地域が神憑ること，憑いて語ることへの特定の色合をもった信仰を強く含んできたと考えるのである．そして，この流れの中で現在に存する憑物現象も生じていると考えるのである．私はここで，憑いて語ることへの一般的全地域的信仰を中心的因子として含む文化をシヤマニズム風文化と呼んでよいと考えている．

この旧出雲文化地域は現在の出雲地域よりもより広範な地域にわたっていると考えている．旧出雲文化地域としては，東の美保神社，鳥取県汗西地域，西の石見櫻江町などの大元神楽，南の備後東城町などの備後神楽，高梁，成羽，備中町などの備中神楽などで囲まれた地域を考えている．神憑りの状態におけ

る託宣に重要な意味を認めてきた文化のこい地域である.

先ず，美保神社の様態からみていく.

風土記には美保の郷に横田の社，美保の社が式内社としてあり，美保の社は御穂須々美の命をまつるとされる．美保郷は奈良時代の郡家から東二十七町一百六十四歩にあるとされる．文禄年間に吉川広家の美保関両社殿建立棟札があり，永正十五年の末社客殿[(1)]神社建立棟札には尼子伊与守御代の名がみえるという．室町時代吉田兼倶の神名帳頭註にも島根郡美保，三穂津姫命，一座事代主命とある．客人神社は大國主命を祭神とし，境内末社の宮御前社は埴山姫命とされ，宮荒神も含み蛇藁や神木とかかわるとされる．古くからの神社であることは事実である.

美保神社の祭りは，頭人（一年神主）及び一の当屋，二の当屋を中心とする．四月八日準官（当屋を既につとめたもの）の中から客人当屋の当指が行われる．客人当屋として一年，客人社[(2)]につかえる間をも含めて，千日間の行をなして四年目に頭人，一年神主となり一年間を務める．美保の港内の賑不賑は頭人の行為の如何によるとされ，女色や不浄をさけ，一室に籠り世人と面談せず，髪は客人当以来伸したるを巻き立て，別火して厳冬の時でも夜参する．その年の当屋も当指しより一年毎日行を行う．一の当は三穂津姫命を二の当は事代主命を祭つるとされている.

この頭人及び両当屋を中心に神事は行われるが，その中心的役割は神憑の状態の中に於てであった．かつてこの頭人や当屋になるものは十六流或は十八流の頭筋の家に属することを条件としていた．親族構造とのかかわりも強い.

次に，この美保神社の祭りが，神憑りを中心とし，古代的なものを含み，地域全体を指導するものであったことを示すのに神社の神事を観察していってみよう.

最も中心的な神事である四月七日の蒼柴桓の神事について述べる．これは前年の祭りの時，四月七日の当指の折りから始まるが，具体的には一月十二日の役人揃，三月二十八日には客調べ，三月三十一日に潮掻きと御籠，四月一日に人割の儀が行われる．これは上，準官のすべてを，両当屋との親族関係の近さ

で分けるものである，各人の名を読み上げ，両当屋の世話人（上官）が自己の当屋との親族関係を申し立て，論議する．美保内における親族構造を年々あらゆる方向から検討することを意味する．四月二日には採火の儀が行われる．頭人，両当屋．役人出席して，頭人が中心になって檜板を揉杵で揉み火をつくる．古代性を示すものでもある．これで餅をつき，酉（とり）造りを行う．頭人以下．上番総出席．羽織袴である．その真剣さを示す．酉（とり）は立鶴，居鶴，亀，犬，兎などを含むが，この種類にかかわらずすべてを酉（とり）と称する．この二つの行事は，古さと，酉（とり）という北方シヤマニズムにかかわる因子を示していることの故に重要である．四月五日，両当屋，頭人は男柱，杉丸太二本を立て上部に榊を飾り荒縄で巻立て垂木を横木とするものを立てる．五日夜祓解奏（白蓋である）を行う．

四月六日大棚飾を終ると，当屋は大棚の中央に大座蒲団を敷いて，眼を閉じて静座する．小忌人，供人も並んで座わっている．賽客は群集礼拝し，信仰甚だ厚しとされている．当屋はこの場面で神憑っているが故に神として礼拝されている．

処でこの場合，当屋は化粧している．顔を白彩し，額と両頬に薬指の先にて丸く紅を押す．小忌人と供人も同様の化粧をし当屋と並んで着座している．

翌四月七日も両当屋は午前九時頃より大棚の前に座す．小忌人，供人も同様である．化粧も前日と同じである．当屋は神憑っている．賽客群集し，礼拝盛んなりと述べられている．この大棚には写真Ｉの如く，日月像，四神鉾，八雲板（鏡板）大竜などが並べられている．これらは神事の間．神憑っている当屋，小忌人とともに移動する．神憑っていることと関わっている一群の symbol である．

神船に移乗するが，小忌人が神船に乗る時は当知（たつしや）に負われ，附添二人及び供人を従え，八雲板とともにその当屋の神船に乗る．神憑っている当屋は腰抱きの準官二人に抱えられて神船に乗る．日月像．四神鉾．大竜も乗船する．この船内でも．御船番（上官である）は中央に座する当屋の正面に進み，扇子を正して礼拝の後，斎錫箱を用いて，当屋を化粧する．白彩し，額と両頬に紅を薬指の先にて丸く押し，髪をなでる．写真Ⅱ，写真Ⅲの如くである．

神船がお宮の前に着くと，賽客神船に刹到し信仰甚しとさる．当屋神船を降りて神門に達す．両当屋は神門内で相並んで床几にかかる．ここでも両御船番は両当屋の化粧をなおす．化粧は同じ三っの紅をさすものである．日像，月像，四神鉾．八雲板．大竜はこの間，神憑っている当屋とともにつねに移動している重要な問題点である．

先ず白彩して三つの紅を入れる化粧から考えて行く．神憑る場面での化粧である．三度も同じ化粧が繰返されている．

このような化粧が．何処にあるかを求めたのである．日本には見られなかった．処でこれは大陸にあったのである．全くその通りに白彩し，額と両頬に指の先にて紅をつけるものである．写真 Ⅱ，Ⅲ である．韓國仮面劇の仮面にあるものである．somu 生巫と閣氏の化粧である．生巫は神憑るものであるが，閣氏については，成造本歌に，「銀金宝佩，宝物閣氏，心闊かに遊び給へ．……水甕は五徳にて(3)支へ置きたれば，青琉璃あり，黄琉璃あり，竜王閣氏，心闊かに遊び給へ，……厠には七目閣氏が昼は五十尺の髪を長く垂れて踏板の上に遊び給ひ」の如くであり，神憑るものとかかわっているようである．普通には閣氏とは既婚夫人のことともいわれ，またこの化粧は現在の韓國でも古式での花嫁は，この化粧，白彩し三つの紅を入れることを行う．私はこの化粧について，新羅で花郎が女装したことに関わるのではないかと考えているが，ともに神憑ることにかかわる源花か花郎から来ていると考えている．11世紀のものとされている回河の仮面にも，紅は少し大きいがみられる．全く機能的な意味をもたない白彩と額と両頬の紅の両者における存在の姿は，大陸のシャマニズムと出雲のシャマニズムのかかわりを示していると考えられる．

次に，神憑っている当屋や小忌人とともに，その祭りの過程において常に移動する，神憑りの祭りの中心的重要シンボルとしての八雲板（鏡板）と日像月像，四神鉾，大竜について観察する．

先ず．大竜については，これが大元神楽，備後神楽，備中神楽において中心的な位置をしめる藁蛇の小さくなったものとして考えられうることが指摘される．これは神憑るべき当屋の入口の男柱に大竜を付け，大棚の場面でも，神船

の中へも当屋とともに移動することでも明かである．これと同じ意味をもつ蛇藁については後に言及するが，これも神憑ることと中心的にかかわっている．

八雲板は写真Ⅳ，Ⅴ，Ⅵの如くである．神招ぎの板であるともいわれる．表面は五色の彩雲が三つあり，その中央の太陽は朱に純金の三足烏がおり，その下に，朱の鳥居及び老松，笹をえがく，裏側は一切同様であるが，月があり，円は銀色で兎をえがく，兎は走れる兎である．帰殿行列の際には一の当の小忌人は太陽を，二の当の小忌人は月を現わす．この神招ぎの八雲板に，太陽の中に三足烏があり，月の中には兎がいる．

日像及び月像及び四神鉾は写真Ⅶ，Ⅷのようであり，日像は金色に黒にて三本足の烏，月像は金色に銀にて兎の絵とされている．この兎は臼にて薬をする兎である．四神鉾の彩旛は鉾の中央の輪に吊す．青竜はあおき竜に赤き火焔を附し．白虎は白き虎に火焔，玄武は亀を蛇の巻きたるを画くとされ，全部刺繍である．現在のものは写真Ⅸ，Ⅹである．以前は青竜，白虎，朱雀，玄武と書いた紙旗を用いたといわれている．御船番用の扇も一面が白地に赤い丸，他面は黒地に赤い丸であり，太陽と月を現している．要（かなめ）には赤白青を含む四色の房がついている．四神五行の位置は大きい．

八雲板の太陽は朱の円に，純金の三本足の烏であり，裏面の兎は銀の円に走る兎といわれている．この兎は奇妙な形である．写真Ⅵの如くもろもろの筋肉が現れている．その尾は奇妙に長い．この兎を高句麗古墳の写真Ⅻの蟾蜍と比較すると強い類似がみられるものである．日像．月像と四神鉾にみられる三足烏と兎，写真Ⅶ，Ⅷは．金色に黒の烏であり，兎は臼で薬をする兎である．

この三本足の烏を含む大陽と兎を含む月は美保に何處から来たものであろうか．この三本足の烏と兎は隠岐にもある．これらは何処から来たか．

私が旧出雲地域と呼ぶものは，みさき，藁蛇を始め種々のものを共有している．岡山県成羽の備中神楽の舞台である神殿の心柱に竹を立て．白と赤の60 cm以上の餅をこれにはさみ，それを日天月天という．美保の日像月像と同じである．この舞台で藁蛇に巻かれて，神憑っての託宣がある．美保で大竜が当屋にともなうと同じである．この旧出雲地域の同質性を次に観察して行く．

（二） 石見の大元神楽及び備後神楽

両方ともに，神憑っての託宣を中心とするものである．と同時に，その神楽の中で四神，五行の占める位置は中心的であり極度に大きいものである．

大元神楽は邑智郡，那賀郡，江津市などにみられるが，大元神に捧げられるものである．大元神は同族神である場合も，部落の神である場合もあるが，桜江町の場合，神社と呼ばれるものも二三あるが，神木や小祠だけのものも多い．かって，この神楽は神職によってなされた．七年とか十三年とかの式年の神楽である．大元神楽は大元の森に仮屋を設けて舞ったものであるが，今は氏神の拝殿や民家の座敷を斎場としている．その舞台の東の隅を元山（もとやま），西の隅を端山（はやま）といい，それぞれ小俵を吊し，舞台の四面に切紙をはり，中央に雲を吊り，九個の小天蓋を吊す．藁蛇を造り，北の隅の柱にしばりつける．清湯立，四方堅，神殿入，胴の口，潮祓，帯，手草，御座，天蓋，綱貫，六所舞．御綱，五竜舞などがあるが，御綱の部分を少し細かに記述しよう．

斎主以下全員が舞台に出る．副斎主が一束幣を持って先導し，斎主以下全員ミサキ幣をもって従う．写真Ⅺである．藁蛇を降し適当の高さにする．託大夫を藁蛇にさわらせ，後から腰だきが支える．斎主が，招きまつるこの里に鎮まります大元大明神の幸魂，奇魂，今宵ぞいずくという．一同が，今年，この月，この日のこの時，神楽の斎庭で神遊びしようと答える．藁蛇をゆり動かし，次々に部落中の神々を呼ぶ．揉み合う中に託太夫に神が憑き．神憑りの状態になると，氏子代表が問いかけ託宣を聞くのである．聞き終ると斎主が神返しの詞を述べ，託太夫の肩をたたいて正気に返す．

神楽の観衆の中から神憑るもの，託ずくものの出た那賀郡旭町木田の場合を述べてみる．観客の一人が突然託ずいた．そこで綱（藁蛇）をほどいて長く張り，それ[4]に晒し木綿でその人の手をしばりつけ，腰だきが背後から支える．この男を中心に神名帳をもって村内の神々をよみ上げる．「何神社のさきみたま今宵ぞいずこ」一同，「今年，この時，この日のこの時，神楽の庭に神遊びしよう。」「向う七ケ年の作柄は」「豊作だぞう」「向う七ケ年の火難は」「あるぞう」

「その方向は」「西だ西だ」．この人は翌一日ぼんやりしている．神憑りは非常に体力を消耗するものである．神憑っている時には青竹をつぎつぎに握りつぶしてしまう力がでる．私のみた場面でも次々に青竹を握り潰していた．

綱だけでなく，天蓋も，御座も，神憑ることにかかわる．神憑っての託宣は神楽の中心であるが，同時にこの神楽全体は四神，五行の思考を中心的部分に含んでいる．その姿を少し細かに観察する

神迎は，「降りたまへ降り居の庭には綾を敷き錦を並べ御座と踏ませうやに始まり[5]，……東は春の色にして左青竜とも申すなり，久々能智の命とて，木徳すでに現れて，木々の梢の若緑，……南は夏の色にして，前朱雀とも申すなり，迦具土の命とて，火徳すでに現れて，……西は秋の色にして右白虎とも申すなり，金山彦の命とて金徳……北は冬の色々して，後玄武とも申すなり罔象女の命とて水徳……中央は四季の土用を司どり，黄なるは土の色にして……埴安の命とて土徳……東は青，南は赤く，西は白，北は黒色の染め別けの山」の如くであり．東南西北中央にかかるものである．四神五行の思考を中心に含んでいる．

御座も，「先以て東方句句迺馳命，南方軻遇突智命，西方金山彦命，北方……中央其外あらゆる神を此御座に[6]招請し，綾の御褥錦の御座を敷並べし久方の天殿に舞台をはって舞遊ぶ」の如くである．これも四神五行をその中心的部分として含んでいる．

五竜王は大元神楽では欠くことの出来ないものといわれている．右手に鈴，左手に青竜王，赤竜王，白竜王，黒竜王と記した小旗をそれぞれ一本づつ持ち，五郎が出て一人一人と問答の末，押し合いになる．翁がこれを分けて，最後に喜びの舞をする．「青帝青竜王は東を知行せん．赤帝赤竜王は南を知行[7]せん．白帝白竜王は西を知行せん，黒帝黒竜王は北を知行せん……かくて所領や一年を五人に割る」形のものである．八拍子の五神もこれと同じである．四季の歌に始まり，国常立王の第一子春青大王，夏赤大王，秋白大王，冬[8]黒大王が各方を所有し，末子埴安大王に対して，或は右白虎の幡じるしを立て，或は後玄武の幡じるしを押し立てて陣をはる．翁が現れ，日光殿，月光殿某を召され五神

に命令せよとのことの故とて，かくて所領及び季節を五人に分つのである．

更に真榊(まさかき)でも「榊葉を折り取り手に持ち差し上ぐる．謹請(きんじょう)東方と拝むには，四方の神も花とこそ，三度拝めば神降(くだ)る．(東方南方西方北方中央と五度言う)」とされ，潮祓でも，「惣じて日本国中に斎はれ給ふ三千一百三十余座の式内の神社，其外式外の神々申降して清しめ祭らん……東方南方西方北方中央……大小の神祇申降して清しめ祭らん……空に取りては日神月神明星……」とされて(9)おり，その後の変化によって表面は変りながらも，四神五行が，神憑りとともに中心的な位置をもっていたことが考えられるのである．大元神楽でも藁蛇が大きな核的なな意味をもっているが，これについては別稿で論じたのでここでは言及しない．この蛇藁につけた或いはしばられた形での神憑っての発言が託宣としての意味をもつ．

備後神楽の場合も，7年，13年，33年など式年の神楽である．東城町の場合，荒神神楽は前神楽，本神舞，灰神楽に分けることが出来，前神楽と灰神楽は頭屋で，本神楽は神殿で行われたといわれている．四日四夜行われたが，最近は短くなって来ている．四日四夜の神楽の場合，二日夜の荒神の舞遊びや，四日夜の荒神の舞納めなどにも神憑り(10)がみられる．

荒神の舞遊びで斎主が奉幣を神柱の頭上で振ると次第に神憑りとなり，太鼓が急調子になると大声を発する．助斎の神職が神柱の腰を抱き軸幣を握らせる．太い青竹の幣も割れてしまう．助斎の神職は神柱から神籤を頂く，斎主が奉幣で神柱の頭上をはらい，神憑りはとける．第四日夜荒神の舞納めがある．蛇を東西の柱に渡して，二人で大刀をもって蛇の鱗打ちをする．終ると蛇の前方に俵をすえ，神柱着座して神憑りになる．大声を発する．青竹の軸幣をもたせる．この四日目の託宣の前にも王子舞が舞われる，託宣の前には必ず舞われるものという．五行であり，五竜王である．先に述べた四神と五行にかかわるものである．備後神楽でも榊舞，莫座舞，神迎などは第一日目に行われるが，神迎えの場合，着座の四人に東南西北の順で青赤白黒の幣が渡され，青に青土，青しやぐま，……赤に赤土，赤しやぐま，……白に白土，白埴弓，黒に黒土黒がらす，……うこんくちなしきはだ色……の如くに舞う，ここでも四神五行は神憑

りにかかわっている．綱入れの問答でも，四季の歌が求められ，内側が東青，南は赤く，西白くというと，外側が北黒，中は黄なりとぞいうのように答えるなどである．表面的な変化にもかかわらず，神憑ることとともに，四神，五行がその中心にあることがみられうる．四神五行は神憑りの前提でさえある．

（三）備中神楽

ここでも，年々のものでない大きな荒神神楽は，七年，十三年，三十三年の式年の神楽である．式年の間の六年間に出生した子のある家から，しきい俵を供える．神憑っての託宣の折りに座るものである．成羽の社は，大元八幡神社という．大元とのかかわりを示している一つの現れである．

一戸だけで荒神をもっているものも，株で祭るものも，部落でもっているものもあるが，十戸から二十戸位いの部落を単位とするものが最も多いとされている．頭屋は大当屋という名で世襲されている処が多い．

備中神楽は神殿（こうどの）を設けて祭るが，この荒神神楽の神憑っての託宣は，この地域の人々の生活を支配し，指導するものであった．数日にわたるものであったが，最近は簡素化され二三日のものになって来ている．この神殿がけは氏子全員で神楽の当日か，前日に行われる．先ずかなりの太さの三間程の柱二本をたて，それに二間の幅の横木を渡す．その横木の中央に手ぎねをくくりつけ，そこに白蓋を吊す．四本の柱を四隅に立て，二間四方の舞台を造る．二本の心柱へは日月をかたどった紅白の直経六十糎以上もの鏡餅，日天，月天を竹にはさみ四手を添えて立てる．四本の柱には竹や榊を添える．神憑っての神託の為の舞殿に日像，月像及び藁蛇が伴っているのである．美保における諸 symbol との近さを示しているものでもある．

古くは，備中神楽の中心は五行であったといわれている．東南西北の長男，次男，三男，四男が，中央の末子と一年を分ける神楽である．この五行や，綱舞，布舞，榊舞などが古いものだといわれている．

ここでも，四神五行と神憑っての託宣は全く一つの全体として動いている．

託舞といわれるものの最も中心的なものは綱舞である．藁蛇は，大元，備後，

鳥取汗西の場合と同じく，この神楽でも中心的な役割をもっている．その年の新藁で造り，頭には三本の幣を立て，尾があり長さは四間，胴回り二尺ぐらいのもある．綱舞はこの藁蛇を神殿に入れるところから始まる．綱入れという．ここでも問答がなされるが，そこでも東南西北中央にかかわる問がなされ，答えがなされる．かくて神殿に入り，神殿にそれが張り渡される．ここでの問答は多くが五行にかかわる．鱗打ちがなされ，綱舞に入る．四季の歌が歌われる．綱の両側で二人の神職が綱を揺り動かす[11]．それぞれが綱に寄りかかりながら身体を回して端まで行き，反対側に出て同様の形で進む．中央で出合う時に手を打ち合ったり，焼き石を包んだものを打ち合ったりする．神憑りをもたらす為の操作である．神憑った太夫を米俵に座らせ，神体幣を持たせる．その折り藁蛇を大夫の身体へ巻きつける．神職が出てお祓いし，託宣を願う．

布舞も託舞と言われる．一反の白布の端を持って，上下前後左右に，輪をえがいて回す．太鼓が急調子になり合せて回す．神憑ると座らせ神体幣を持たせる．神職がお祓をして，託宣をうかがう．白蓋も同様に神憑りにかかわっていた．神職が中央に座している．白蓋が上下前後左右に動かされ，神職の肩まで入る．ここで神憑ったという，東南西北中央，木火金水土，青赤白黒黄，東木徳霊神，南火徳霊神，西金徳霊神，北水徳霊神，中央土徳霊神などにかかわる唱えごえがなされる．四方固めという．

備中神楽の場合も，この神憑ることとともに，四神五行はその神楽の中核を構成して来ている．

榊舞と剣舞を事例としてみていってみよう．榊舞は古いものであるが四季の歌に始まる．これにかえて五行の歌がなされることがある．それは，「万世に種はあれども句句ぬちの……名のみにして姿は見えぬ石と金打ち出すれば軻遇突智の神……金山比古をうつす神垣……月影を写す氷は水波女（みずはめ）の神の作りし鏡なりけり……草木まで埴山比女の……」の如くに表面は変っていても中核は四神五行にかかわる．表面的変化にもかかわらず，根底には大元．美保の symbol と同じものを示している．榊葉を一枚づつ取って四方にまき，神職や氏子に授けたりもする．[12]

剣舞(けんまい)は五行につづき，太郎から四郎までと五郎とで舞われるので，東南西北中央四神をめぐって行われる．「東方へ東方へ．剣の剣舞まいらしようや，南方へ南方へ……西方へ西方へ……東方南方西方北方，中央五郎の王子が御座に直りて御酒盛る時は……」のようである．

五行は幡分けともいい，五色の幡を分ける．備中神楽の中心であり，主要部分であったといわれている，数時間に及んだという．

まず父の万古大王が五色の幡を手に舞う．我が子の四神を集める．このあたりに木句廼智の神太郎王子はおわするか……面を見れば春に生れ木の性徳をもつ故に幡を青く染め……春三月を領知せよ，青の幡を与えよう．……他の三人に対しても火神軻句突智の神……の如くに進められ一本づつ幡を与える．……第五王子埴安命……」の如きである．石見から備後，備中，鳥取汗西にわたる地域が神憑ることと四神五行をめぐって美保神社の symbol にみられるものを，比較的古く共有している姿が観察される．写真XIIは成羽の備中神楽の白蓋の切紙であるが，美保の八雲板と同じ pattern をもっていることが観察される．月と太陽があり，鳥があり，松と笹とがあるのである．

美保の諸 symbol は，決して美保だけに孤立して存するものでなく，広範な地域に共有されているものの残存であることが明かになったと思う．克明に神楽歌を比較して行くと，基本的なものの共有とともに，その外皮的部分に大きな異りがみられ，その異りが比較的近い時代の修験による共有などを否定する．

（四）　出雲のシヤマニズムと北方シヤマニズム

処で，このような美保，大元，備後，備中神楽に囲まれた地域が，同質的なものを強くもっていることが観察されるが，神憑っての託宣に大きな意味を認め，それに従って生活を規制し，四神五行日像月像を中心的な重要 symbol としてもっている宗教文化，神憑る場面で顔を白彩し，三つの紅を額と両頬に入れる文化，それが他の地域の何処にあるのかを求めて行った．

そのような文化は，神憑る場面で白彩し三つの紅を入れるものについては，日本の中にではなく，大陸にあったことが見出された．それは朝鮮半島に，旧

高句麗の地にもみられたのである．

処で，四神五行日像月像の文化因子も，この白彩と三つの紅の来った方向から流れ来っている．この四神，日月像のシンボルを最も明確に示しているのは高句麗の古墳壁画である．高句麗は蒙古系ツングース系といわれ[13]，北方民族であり，北方シヤマニズムの中にある人々である．この高句麗古墳の壁画の観察は，私が今まで述べて来た美保，大元，備後，備中の神楽の基底にあるものと，全く同質的なものを感じさせる．日像，月像，そして四神図，鳥，竜，飛翔は高句麗古墳壁画に基本的な特徴である．通溝や平城附近の高句麗古墳壁画は日月像，星座，四神図を中心とし，三本足の鳥があり，蟾蜍が兎が存在する．五六七世紀のものである．次にその二三のものを観察する．

六世紀前半といわれる舞踊塚の場合，美しい多彩な絵画と文様で飾られ，多くの人々が画かれているが，ここで問題とするのは，日月像及び四神である．月象には蟾蜍，日像には三本足の鳥が画かれている．白虎，青竜，朱雀，男女の飛天等がある．六世紀後半といわれる四神塚の場合．美しい四神図をもつ．玄室の南壁に朱雀，北壁に玄武，東壁に青竜，西壁には白虎があり，三本足の鳥を含む日像，蟾蜍を含む月像があり，蛇尾の鳥人が一対，日像，月像を捧げて雲の間を飛翔している．写真XIIIである．蛇尾の鳥人と日像は重慶のものとも写真XIVの如く全く同形である．双楹古墳の日像と月像の姿を写真XV，XVIに示しておく．この蟾蜍の形体は美保の走る兎との類似性が強く感じられるものである．

この高句麗古墳にみられる日像月像と四神，三本足の鳥と蟾蜍，兎，などは，出雲中国山地の宗教文化との強い同質性を示している．

この四神，日月像が朝鮮半島のシヤマニズムにかかわっていることについては，赤松智城，秋葉隆氏の集めた巫歌の中にも現れている．成造神歌などの中に，東南西北中央の形が頻々現れて来ている．

その城隍賽神に，

「東方をならす人夫達よ，青鶴一双埋まり居れば，鶴の頭を傷けぬやう，南方をならす人夫達よ赤鶴一双埋まり居れば鶴の頭を傷けぬよう[14]．西方をならす人夫達よ白鶴……北方を……黒鶴一双埋まり居れば……中央をならす人夫達よ

金蟾が埋まり居れば，蟾の頭を傷けぬよう静かにならせ」これは四神と月像を含むものであり，高句麗の古墳壁画につながって行くものである．

成造神歌に，

「成造の本郷は何処，慶尚道安東の地……この家の基地をならせ……東方の柱礎一間には青竜一双入りて，南方の柱礎二間には紅竜……西方……白竜一双，北方……黒竜……真中[15]の棟には黄竜……」

「東方には青旗を立て．西方には白旗，南方には紅旗，北方には黒旗，中央には成造夫人が黄星の旗を高く立てたり．……東方の地をならせば青獅子の驚かぬよう．西方の地をならせば白獅子の驚かぬよう……中央[16]の地をならせば金亀の驚かぬよう……」

このように四神の思考は，巫歌の中にも型として入っていることがみられるのである．そしてこのようなくり返し方は古さを示しているともいれれている．

更に，この四神日月像は現在の韓国シヤマニズムの道具の中にも入っている．このシヤマニズムの道具は師から弟子へ大切にゆずられて来ているものである．現在の道具の中に，その存在が観察される．京城の巫である李芝山氏の諸道具は写真XVII，XVIII，XIX の如くである．美しい紅の衣装には，日像の三本足の鳥と月像の薬をする兎とが，並んで使用されている．これは明確な日月像であり，現在に生きて巫の衣装の中にシンボルとして使用されているものである．京畿道．黄海道には一円にあるという．神鈴は師から大切に伝承されるが，そこには日月及び星が刻まれ，巫扇にも日月が両側に存している．五方神将，東南西北中央の像も存在する．大陽と月は美保でもみられたが，備中での日天月天にもみられた如く，朝鮮半島のシヤマニズムにおいても大きな位置をもっている．

太陽と月を鏡として予言と結びつける考え方は北方には広範に存しており，シベリヤのシヤマンも太陽や月を表す金属板や鏡をその衣装に吊し，シヤマンの大鼓でも日月と鳥はその多くに含まれている．

高句麗の古墳壁画，巫の道具を通しての観察は以上のようであるが，話を戻して，出雲．備後，備中，石見にみられた五行，五竜王の神楽がかってそれら

の神楽の中心であったという点に帰る．美保における神憑る場面での白彩と三つの紅の化粧が朝鮮半島における仮面劇の生巫の化粧とかさなっていたが，その仮面劇の現在の筋は，化粧については昔のものを残しつつも，僧が閣氏（女の人）にいいよる．両班が閣氏にいいよる．結婚初夜の間男などの形の，強い両班批判のものとなってしまっている．しかし，ここでも，かつては五行五方神将が中心であったといわれている．

洛東江の本流，支流の流れにそって，五広大（おくわんで），野遊劇（やりゆう）とかいわれる仮面劇が広まっていたとされている．仮面劇は今日のそれのように一芸能であったのではなくて，祭りの部分であった．この五広大は現在統営（とんよん）や固城（こそん）に存するが，かつては洛東江の流れにそって存し，晋州や馬山にも存した．[17] 晋州や馬山の五広大では，五方神将軍舞が行われていたといわれている．五広大は水営（すよん）の野遊（やりゆう）劇と同じく．正月十五，十六日に行われ，東南西北中央の五方将軍が舞うものであったと言われている．また，比較的古い演出とみられる水営の野遊劇では首両班，二番両班，三番目両班，四番目両班，道令様（わかさま）の五両班が登場する場面を水営五広大と呼んでいるという．備中神楽の五行では太郎，二郎，三郎，四郎が東南西北であり五郎が中央である．大元神楽の五神では，第一皇子春青大王，第二皇子夏赤大王，第三皇子秋白大王第四皇子冬黒大王であり，この各四神に対するものとして末子（ぼつし），埴安大王がある．このようにして出雲の側から朝鮮半島に渡って行って考えると五広大，野遊劇が五方を中心とするもの五方神将舞を中心とするものであったらしいことがより強く考えられてくるのである．

このように観察して来ると，五行，四神，三足鳥，兎，三つの紅を含む出雲のシャマニズムを北方シャマニズムとかかわりをもつものとして考えることが無理なことではないということがより強く理解されて来る．

このように旧出雲地域のシャマニズムを大陸のそれとかかわるものとして考えることが出来，それが高句麗にまでつながっていたと考えることが可能であるとするならば，高句麗のシャマニズムは北方と強くつながっているので，更に，それと，ツングース，ヤクート，ブリャートに存したシベリヤの北方シャマニズムとのかかわりを考えてみることは仮説としては当然のことであり，ま

た，なさねばならない一つの重要な操作であると考える．というのは，シベリヤのシャマニズムはエリャーデ・ハルヴアを始めとして多くの研究者によって比較的細かに研究されて来ているからである．

（五）北方シャマニズム

出雲のシャマニズムを考える場合に，この北方シャマニズムの流れを考慮すべきかどうかについての思考を進めて行くのに，ここでは，鳥のシンボルの問題と，鉄及び神木．神竿の問題を取り扱っていってみる．

写真XXはシャマンの鳥型の衣装を示している．テレンギツト Telegieten カラガス Karagassen ヤクート Jakuten ドルガン Dolganen ツングース Tungusen などのシャマンが鳥型の衣服を，満洲 mandschu，ソロン solonen トランスバイカル・ツングース Transbaikal Jungusen などが鳥と野呂鹿の衣服を含んでいるとハルヴア Harva Uno.[18] フィンダィセン Findeisen[19] が整理して述べている．

Holmberg[20] は ゴルドのシャマンについて，シャマンが他界を旅行するとき，koori がシャマンの魂を運び．Buču がこれを護衛し，その鳥は鶴に似ていて木の像は山羊の皮で覆れ．Buču は人間のようで羽と足とをもち，これも山羊の皮で覆れているとしている．Troščanskij はヤクートのシャマン衣装は鳥を示しており，シャマンがその助けで他界に行く．L. Sternbergs はシャマンの衣装を翼とみており，Georg Nioradzes はシャマンの上衣は守護靈を表象し，それを身につけるとその精霊の力が彼に浸みとおり．その力で天や地下の世界へ移動することが出来るとする．鳥型衣装はシベリヤのシャマンの場合最も多く，最も中心的である．鳥の羽毛はシャマンの上衣に多量に下っている．墳墓から出た多くのシャマニズム的事物にも鳥に似た人間の型がみられるとする．

Ye.D. Prokofyeva[21] の，Golchika の近くの Yenisey の湾の岸部の400人の人口をもつ東サモエードの小集団 Enets のシャマンの衣装の調査でも，そのシャマンの上衣などが材質，形態について克明に計られているが，Enets の上衣は Selkup や Ngansan と同じように鳥の形を示している．鳥の実際的な姿に出来るだけ近づこうとしている．長い羽や短い羽が用いられ，羽の束が尾として使

用されている．Ngansan のシャマンの上衣は Enets のものに比してペンダントがかなり貧しいものであることなどが指摘されている．ともかく，シャマンの衣装の鳥型についての言及は Harva や Findeisen, Eliade, などを始め[22]多くの研究者によって充分になされている．

鷲のような鳥が世界木にやって来て，巣を造り，卵を生み，それからシャマンの魂が孵化するという型の話も多く，また，ヤクートの伝説に，死んだ若者が啄木鳥に上界に連れて行かれ，そこで鷲のような鳥によって孵化され，遂には小さな蝶のようになる．最後に啄木鳥は彼を地上にもどす．そこで彼は森で働いている女の頭の天辺に落され，彼女は妊娠し，子を生む．それが偉大なシャマンになる．

多くの枝をもつ木があり，その木の上で全世界のシャマンは育てられ，シャマンの力の大きい程，より高い枝で養育される．シャマン自身はシャマンの魂をそだてたのは鳥であるという．このような型のものも多くの事例をもつ．

ここに北方シャマニズムと鳥との強い結合がみられる．この鳥との結合は朝鮮半島まで明確につながっている．長細い木柱の上に刻木の鳥の形をつけた鳥桿は慶州にまでもつながっている．帽子の鳥の羽や，蘇塗（そと）にもみられる．

この様態を述べる事例は数多いが．ここでは，赤松．秋葉のものだけに少し言及しておく．

水殺竿（スサルテ）は細長い木柱の上に鳥形をつけたものの事例として，江原道高城のものと忠清南道牙山のものが写真として揚げられているが，その朝鮮半島での分布は広い．満州松花江下流のツングース系ゴルヂにも鳥桿があるが．そのシヤマンの住居にも鳥桿が二本あり，これとならぶ最も長い木桿には蛇，亀，蝦蟆の神形が描かれている．沿海州のオロチでも，蒙古の鄂博にも鳥桿のあることが報告されている．ツングース系フィン族やゴルドの鳥桿にも言及している．朝鮮半島では最近は農村でみかけることは少くなり，慶州の博物館などにも，その片隅にみられうる．

このようなシヤマニズムにかかわる鳥への強調は美保の神事では四月二日の酉造り，八雲板の三足烏，高梁成羽の白蓋における鶴などにもみられるのである．

先に事例としてあげた樹木崇拝や神竿をめぐる様態についても強い類似がみられる．

シベリヤについて世界木，神竿の問題に言及したが，朝鮮半島でも神木は多い．欅が最も多いが，城隍木，山神木，洞神木，本郷木等の名で呼ばれている．どの村落も神木をもつといってもよいであろう．処で先に言及した旧出雲地域の場合，神木は何処でも存していた．石見の大元神楽の場合にも神木は必ず存する．神楽の終った後藁蛇を列をなしてもって行き神木に巻きつけておく．土に帰すという．備中神楽の場合も藁蛇は神木に巻きつけられる場合が多いが，荒神の祠に巻きつけられる場合もある．この藁縄での縄引きの存在も岡山県北房町の場合と朝鮮半島の場合と類似を示している．嶺南では綱引の後，綱は城隍堂や洞里のはずれの大木に巻きつけておく．佐陀神社の場合も今の社殿から離れて約一時間の処，岡の上に神木があり，主要神事がそこで行われる．大元神楽，備後神楽，備中神楽すべてで神木はある．神竿の問題は美保における男柱，神楽における心柱，白蓋，千道（ち）などが近い関係をもっているものである．

宗教現象はいつも一つの宗教文化としてあるものである．宗教文化複合としてあるものである．諸文化因子を含んだ統合体としてあるのである．

このような宗教文化複合としての北方シヤマニズムは金属，鉄の問題を含んでいる．

エリアーデ，ハルヴア，フィンダイセンなど多くの研究者はシヤマニズムと鍛冶屋について特に章を設けている．写真XXの如くに，シベリヤのシヤマンの衣装には非常に多くの金属がつけられている．その多くは鉄である．シヤマンの衣装の研究はブリヤート，ヤクート．ドルガン，ツングース，エニセイ[23]，オスチヤツク，サモエード，若干のタタールについて．衣装に縫い付けられた金属性のものが広範な地域にわたって同質的であるので，このことがその文化の古さと広さを示していると Holmberg もいう．この鉄がイランからシベリヤへ導入されたのは紀元前6の世紀頃であると Algöldi は言う．この鉄の問題をここで取り上げたのは，旧出雲中国山地で憑物現象，神楽，たたらが特徴的な事実であるからでもある．

ヤクートの諺では鍛冶屋とシヤマンは同じ巣から生れたといわれている．鍛冶屋の力はシヤマンにつぐ．シヤマンの妻は respectable で，鍛冶屋の妻は venerable であるという．鍛冶屋は治療の力をもち，未来を予言しさえする．Dolgan ではシヤマンは鍛冶屋の魂を呑み込むことは出来ないが，鍛冶屋はシヤマンの魂を焼くことが出来るといわれている．

シヤマニズムと鍛冶屋または鉄との関係は非常に強い．そのかかわりを示す若干の思考を先ず記述して行く．

ヤクートのシヤマンの入巫のエクスタシーと幻想について，シヤマンはいう．未来のシヤマンは彼がこなごなにされる儀式を三度経る．シヤマン候補者の手足はばらばらにされ，解体され，骨がきれいにされ，肉がすてられる．目も取りだされる．この操作の後に，すべての骨が再び集められ，鉄でたがいにしばられる．そしてシヤマンとしてもとにもどる．

各シヤマンは猛禽の母をもつ，鉄のくちばしをもち，或は鷲の頭をもち鉄の翼をもつ，長い尾をもつ大きな鳥である．この神秘的な鳥は二度だけ現れる，シヤマンの精神的誕生の時と死の時である．この鳥はシヤマンの魂をとって下界に運び，それを松の木の幹にかけておく，魂が成長すると鳥がそれを地上に持って帰り．候補者の身体をばらばらにして病気や死の悪霊に分ける．各霊がそれを分けて食う．これが未来のシヤマンにそれに応ずる病気をなおす力を与える．猛禽の母が骨をもとの場所にもどすと，候補者は深い眠りから覚める．

ヤクートの場合．古くからの同様な伝説があり，同様な体験の夢想がある．[24] この世界木の枝でシヤマンの魂を卵からかえす巨大な鳥のモチーフは北アジアのシヤマニスティクな神話の中に広く存している．

サモエードのシヤマンの入巫の夢では．シヤマン候補者は沙漠に来て，遠くの山を見た．三日間の旅をしてそこにつき，広場に入って，ふいごで働いている裸の人の処に来た．大釜がある．その男は彼の頭を切り，身体をこなごなに切って大釜に入れる．三年間彼の身体を煮る．三つの鉄床がある．裸の男はその候補者の頭を，最もよいシヤマンの鍛えられる第三の鉄床の上で鍛える．それから三つのポットの一つにその頭を投げ込む……

これはシヤマンのイニシエシヨンにおける夢であり幻想である．しかしそれは古い伝統の中で生じている夢であり，思考である．

このような思考様式の中にも，シヤマンの生れることと鉄との，鍛冶屋との結合が現れている．鉄はただ同じ文化の中にあるというだけのものではない．シャマニズムの中核と神秘的なかかわりを含むものとして存して来た．

エリアーデはこの問題について，中央アジアとシベリヤのシヤマニズムでは，呪的な飛翔，天への上昇，地下への降下，火の支配などの要素が，ばらばらの要素としでてななくて．一つの complex として存していることに言及する．ここでは，特殊のイデオロギーで統合され，特定のテクニックを正当と認めた，一つの complex を構成しているという．この火の支配は鉄の問題とも強くからみ合っている．

ヤクートの神話によると，地下の世界の主鍛冶，Kdaai Masin は鉄滓に囲まれた鉄の家に生活しているが英雄の手足を治したり，有名なシャマンのイニシエーションで役割りをもったり，その魂を鍛えたりする．

ブリヤートの信仰では，Boskintoi 天国の鍛冶屋の九人の息子が人間に製鉄を教えに地上に降りて来，鍛冶屋はその子孫であるという．ブリヤートの鍛冶屋は特殊の儀礼をもっている．馬が犠牲にされ，その腹が開かれ，その心臓が引き出される．その馬の魂は Boskintoi の処にいく．九人の若者が Boskintoi の九人の子供の役を演じ，一人の大人が天の鍛冶屋自身になる．彼が神憑ってエクスタシーに入り，長い独白を述べる．それから彼は舌で火にふれる．かつてこの役の男はとけている鉄を手に持ったという．

処で呪的な熱について，Eliade も，シャマンは単に火の支配者であるだけでなく，神憑りの間に，その口，鼻，全身から炎を発し，火の霊となることが出来る．この種の手練はシャマンの不思議のカテゴリーの中に置かれねばならないという．

このように鉄とか火の因子は，北方シャマニズムにとって，その宗教文化の中に単に共存しているだけではなくて，一つの Totality を構成している部分である．

Yakut のシャマン，彼は老人だが，神憑っている間，跳躍の高さ，そのエネルギについてどんな若者にもまさり，ナイフで自らを傷つけ，棒を含み込み，燃えている炭を食べるといわれる．

シャマンの衣装につけられている金属性のものは多い．Sieroszewski によると30ポンドから50ポンドの金属の飾をもっているという．ツングースやオロチのシャマンが神憑りの状態の場合65ポンドの重さの衣装を着ているが，患者はその身体の上を踏み歩くシャマンを殆んど感じないとされている．

このような正式の衣装をつけない場合，シャマンの力はない．

S. Shashkov によるとシベリヤシャマンの衣装にはは鉄の円盤，神話的動物を現わしている像，鉄か銅の胸かざり，時には鉄製の冠，鉄のくさり，月太陽星蛇アヒルトナカイなどが付けられている．これらの金属製の事物は魂をもち，腐蝕しないと考えられている．

Enets のシャマンの上衣には，鈴[25]，金属板，天の鹿や鶴，鷲，あび（地界の霊的な助け手）かわうそ（地下界の助け手）鳥の翼などの金属性のものがさがっている．

北方シャマニズムはその complex の部分として鉄，鍛冶屋の問題を含んでいたといってよいと思う．鉄との関わりを含んで流れて来ているように考えられる．

次に朝鮮半島における鉄の流れについては，まだ充分な検討をなしていないが，衣類には鉄はさげられていないこと．中国の影響の強い地域ではこの方向の強いこと．また鉄製の道具については写真XVIIIにみられるように．三支槍　神刀　斫刀　七星刀　明図　鈴などが巫の道具として衣類を離れて存している．

また．赤松．秋葉蒐集の巫歌の中には

地神祝願に

地神祖爺は鉄の天翼を身に着け給ひ，

鉄の樋に水を汲み入れて　この瓦屋を建て給ひ，

地神祖母は鉄の裳（もすそ）を着け給ひて，この元堂を建つる時，……

軍雄神歌に

……マスラの霊験術は深さを知らず

　　鉄にて天翼を造り鉄鎖にて襞を付け……

成造本歌に

粉鉄五斗，真鍮五斗，片鉄五斗，十五斗を

下し給ひ大山の大鞴，小山の小鞴，大斧，小斧，大鋸，小鋸，斧……

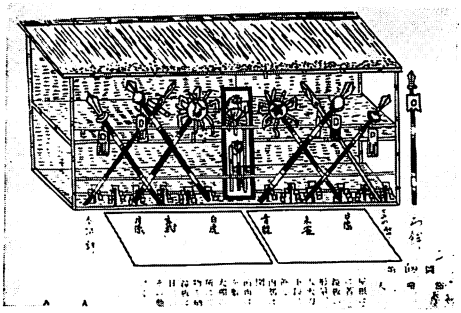
の如きがみられるが，まだ充分な研討はなされていない．製鉄に関する言葉の中には．慶州周辺でも北の方向の言語が含まれていると権丙卓氏[26]も述べている．朝鮮シヤマニズムと鉄，鍛冶屋との関係の細かな検討が必要である．

出雲地域が古くから鉄とかかわりをもっていたことについては，類聚国史に，大宝元年，備後国神石，奴可，三上，恵蘇，甲奴，世羅，三谿，三次等八郡調相換鍬鉄，続日本紀神亀五年に美作国，大庭，真嶋二郡が米を鉄に変えてほしいとし，類聚三代格，日本後紀に，養蚕不便なる故，絹をやめて鉄にしたいとし，天平十七年の木簡にも備後国三上郡調鍬拾口等々と記述されている．この頃に鉄を納めていた国として伯耆，美作，備中，備後，筑前などがあげられている．延喜式にもこの鉄の記述はみられる．

このことは，これらの地域で，八世紀の始めに，たたらが既に充分に発展していたことを示している．此の地域は筑前は別として，本論文において取り扱っている地域であり，大元神楽，備後神楽，備中神楽，鳥取汗西地域と，御崎，藁蛇の分布している処と重なるわけである．と同時に，出雲，鳥取汗西地域を最も濃いものとはするが，憑物の分布地域とも一致するのである．

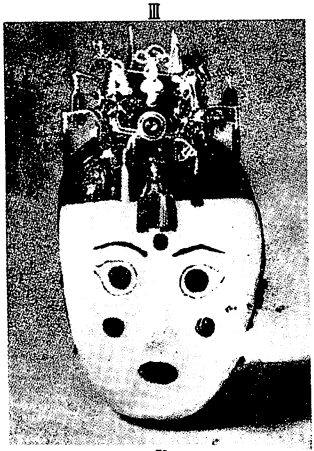
大元神楽備後備中神楽において．みさき．藁蛇につけた形で，或はしばりつけられた形で，或は之れに巻かれた形で神憑りが，神託が下されるわけであるが，岡山県には御前神社の数は現在も多く二十八社を数える．鳥取には大前，大崎というものもある．出雲地域は方墳の最も数多く分布している地域である．処で北関東，上野，下野には方墳も存在し．おさき狐持ちという憑物現象も存在する．そしてその下野には式内社が七つあるがその中二つは大前神社という．一つは真岡のものであり，他は藤岡のものである．両社の御本殿は類似の形態をもつている，竜が何本も本殿からつき出している形のものである．これと同

I



II

III



IV

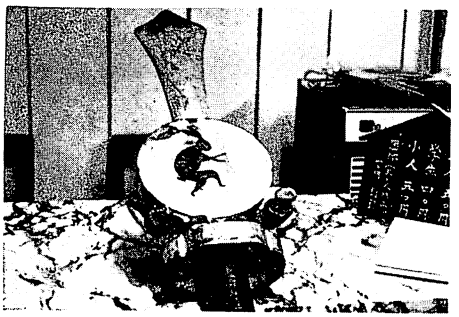
V

VI

VII

IX

VIII



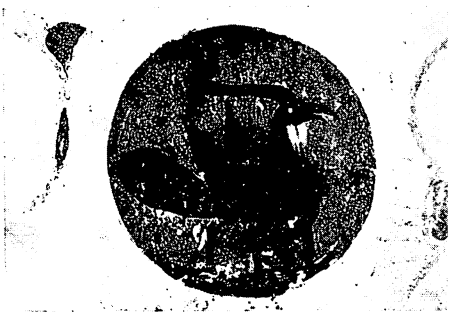
X

XI

XII

XIII

XVI



（韓国仮面劇韓国公報部刊）

写真　Ⅰ　大棚の図（和歌森太郎絵）

写真　Ⅱ
写真　Ⅲ　白彩しての三つの紅の化粧，仮面劇の生巫

写真　Ⅳ　八雲板日像側の上部三足鳥

写真　Ⅴ　八雲板日像側の下部

写真　Ⅵ　八雲板月像側，兎

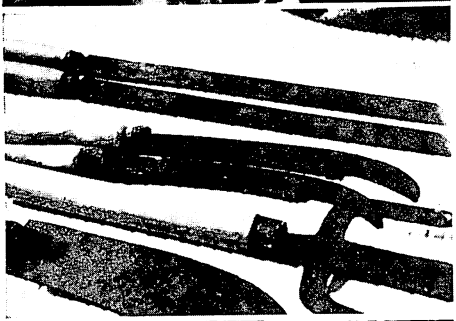
写真　Ⅶ　日像，鉾の三足鳥

写真　Ⅷ　月像，鉾の兎

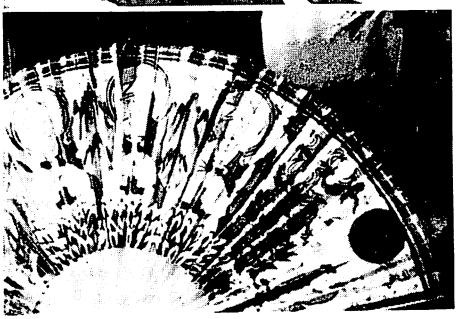
写真　Ⅸ
写真　Ⅹ　東龍，玄武のみをげある

写真　Ⅺ　大元神薬薬蛇をかかぐる場面

XVII



XVIII



XIX

XX

XXI

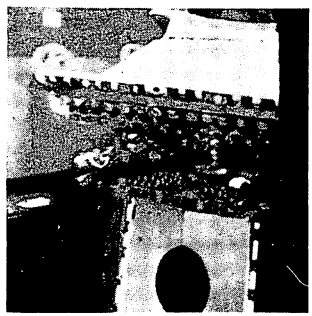


写真　XII　成羽（なりわ）の白蓋（備中神楽）
写真　XIII　高句麗の日月像をかげる蛇尾の人
写真　XIV　重慶の日月像像をかかげる蛇尾の人
写真　XV, XVI　双楹塚の日像月像
写真　XVII　衣類の日月像（京城現在使用）（三足烏と兎）
写真　XVIII　三支槍その他
写真　XIX　巫扇反対側に月がある
写真　XX　シャマンの衣装鳥型及び多くの金属をぶらさげている
写真　XXI　祠，仮面劇

じような形のものを京城での仮面劇の装置の中でもみた．写真XXIである．更にこの両大前神社周辺地域には地下一米たらずの処に，たたらあとがある．藤岡の方は関係地域は比較的少さいが，その関係地域内だけにたたらあとは限られる．出雲文化の complex の流れを考えさせる．間々田に藁蛇も存している．

処で旧出雲地域に帰って，大元神楽で著名な桜江町の諸神社を観察すると，地主神が最も多いが，大元神，山神[27]と並んで，金屋子神が12社ある．たたらの人々の祭る神である．それは出雲能義郡比田村を中心とし出雲，伯耆，石見，備後，備中，備前に及ぶとする．本論文の地域と全く一致する．金山彦命を祭っている．そして，この大元神楽．備後神楽．備中神楽における四神については既に言及したが，その西の神は，この金山彦神である．ここにも四神と，たたらとの関係を感ずるのである．なお，神楽の舞殿を神殿（こうどの）或は高殿という．かつてたたらは野だたらであつたが，建物をもうけるようになつてから，それを高殿（こうどの）という，その最も中心の柱を元山（もとやま）といい，それをたてるのを元山（もとやま）押たてという．この元山に神棚をもうけている．神楽の元山と同じてある．その場合に上木に99本を並べて用いたりもする．この数99 33は巫歌の中でもよく出て来る数でもある．出雲中国山地のたたらは，八世紀の鉄による調の多さにもみられる如くであるが，遠く大陸に直接につながるものであり．神楽，憑物などと一つの文化複合を構成していたものと考えるのである．北関東の場合，中部山地を抜けてのこの pattern の移動を感ずるのである．

以上に観察して来た諸事実を考える時に，出雲の憑物現象の分析を考える場合に，この現象の生起を徳川中期のものとする多くの研究者の立場に対して，もっと広範な時間的空間的流れの中で分析してみることが必要であると考えざるをえないのである．と同時に，ここでなしたように，出雲のシャマニズムを考えるのに，北方シャマニズムの流れとのかかわりを含めて考えてみることが無益なことではないのではないかと考えるのである．私は北方シャマニズムとの関連の中で考えることが必要であると考えている．この仮説的思考のもとで細かな分析を進めて行ってみようと考えている．

註

1) 和歌森太郎，美保神社の研究及び出雲調査テープ.
2) 野村憲治美保神社の祭儀，和歌森，美保神社研究138頁以下及び出雲調査テープ.
3) 赤松智城秋葉隆，朝鮮巫俗の研究．崔正如，東海岸巫歌.
4) まつり No 12 1967 p22.
5-9) 神楽歌内容については，校訂石見神楽台本，桜江町誌，石見備後備中出雲調査テープ.
10) 牛尾三千夫，祖霊加入の儀式としての荒神神楽及び石見備後備中出雲調査テープ.
11) 備中神楽と大元神楽の四季の歌の比較は基本的共有を示すとともに．比較的近い時代の連絡，修験などによる共有を否定する.
12) 備中神楽保存会刊行，備中神楽，備中出雲調査テープ.
13) 通溝
14-16) 赤松秋葉前掲書.
17) 金両基韓国の芸能，韓国仮面劇（韓国公報部刊）.
18) Harva Uno, Die religiöser Vorstellungen der Ataischen Völker. F.F. communication No. 125.
19) Findeisen H., Schamanentum. Das Tier als Gott, Dämon und Ahne.
20) Holmberg, Mythology of all races 4. Finno-Ugric Siberian.
21) Ye. D. Prokofyeva, the costume of an Enets shaman, studies in Siberian Shamanism, Anthropology of the north. Translations from Russian sources No. 4, Univ. of Toronto press.
22) Eliade M. Shamanism.
23) Holmberg 前掲書.
24) Eliade 前掲書.
25) Prokofyeva 前掲書.
26) 権丙卓，韓国経済史特殊研究.
27) 桜江町誌.